

2018 年度横浜ナザレン教会 待降節第四主日 & 降臨祭礼拝
「愛に変えられて聖なる卑賤に生きる」ルカ福音書 1:26～56

【聖書箇所】

ルカ 1:26 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。27 ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。28 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」29 マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。31 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」34 マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」

35 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。36 あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。37 神にできないことは何一つない。」38 マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

39 そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。40 そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。41 マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、42 声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。43 わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。44 あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。45 主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです。」

46 そこで、マリアは言った。「わたしの魂は主をあがめ、47 わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。48 身分の低い、この主のはしめにも／目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も／わたしを幸いな者と言うでしょう、49 力ある方が、／わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、50 その憐れみは代々に限りなく、／主を畏れる者に及びます。51 主はその腕で力を振るい、／思い上がる者を打ち散らし、52 権力ある者をその座から引き降ろし、／身分の低い者を高く上げ、53 飢えた人を良い物で満たし、／富める者を空腹のまま追い返されます。54 その僕イスラエルを受け入れて、／憐れみをお忘れになりません、55 わたしたちの先祖におっしゃったとおり、／アブラハムとその子孫に対してとこ

しえに。」56 マリアは、三か月ほどエリサベットのところに滞在してから、自分の家に帰った。

1 今だけ、金だけ、自分だけ

最近、児童相談所の施設を東京都港区南青山に建設する計画に地元住民が反対している…と話題になっています。このニュースを聞いて、なんとも情けなく悲しい思いがしたのは私だけではないでしょう。今から5年前、2013年に、東京大学大学院生命科学研究所の鈴木宣弘教授がその著書で語った「今だけ、金だけ、自分だけ」という言葉のとおりだと感じました。“今だけよければいい、お金だけ儲かればいい、自分だけよければいい”という価値観です。いまや日本、いえ世界でも、三だけ主義があちらこちらで勢いを伸ばしています。政治や経済の指導者や一部の人々だけではないように思えます。自分は“三だけ主義なんて関係ない”と言える人がどれだけいるのでしょうか。私は正直に自分の中を見返すと、「今さえよければ…」と考え、「たちまち欲望を満たしたい」と駆り立てられ、「自分と自分の大事な人達だけよければ…」という想いに囚われる時があります。私どももそれぞれ、多かれ少なかれ、「今だけ、金だけ、自分だけ」の要素を持っている。それが人間の本質であり、偽らざる真実ではないのでしょうか。

2 ヘロデとエルサレムの住民

聖書に記されているクリスマスの物語は、このような人間の暗部を赤裸々に描き出します。皆さんは、2000年前、イエス様がお生まれになった時、ヘロデ王がベツレヘム周辺で行った幼児虐殺事件をご存知でしょう。ベツレヘムあたりで救い主が生まれる事を東方の三人の博士の訪問を通じて知ったヘロデ大王。救い主が成長して自分の王位を脅かす！…と疑心暗鬼に囚われます。

博士達に救い主が生まれた場所を探し出させ、あとから赤ん坊の所へ行き、殺してしまうことを計画しました。しかし、博士達はお告げに従い、赤ちゃんであるイエス様のもとから、エルサレムの宮殿にはよらずに自分達の故国に戻ってしまうのです。救い主がどこに生まれたか知り損なったヘロデ王は、ベツレヘム周辺の二歳以下の男の子を皆殺しにするという暴挙にでます。「今だけ、欲だけ、自分だけ」が行き着く果てのおぞましい姿です。しかし、実は恐ろしいのはヘロデ大王だけではありません。マタイによる福音書では、東方の三人の博士達から『救い主がお生まれになった』という知らせを聞き、「**ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も同様であった。**」と語ります。ヘロデ王の権力のもとで豊かな安定した生活していたエルサレムの人々は、王が変わることによって、自分たちの生活が、自分たちの生き方が変えられる事を不安

に思ったのです。その結果、ヘロデ王の幼児殺しさえも受け入れざるを得なくなりました。この恐ろしい事件を聞いて嫌悪感を覚えても、「殺されるのがうちの子ではなくてよかった」と胸をなでおろす…それが当時のエルサレムの住民でありました。彼らには、大切な大切な子供を殺されたベツレヘムの親達の嘆きは他人事でした。

そして、このエルサレムの住民の心は、私どもの中にもある…と言わざるを得ません。私どもの内の何人が、ヘロデ王統治下のエルサレムに生きたとして、王に反対し、ベツレヘムの親たちの為に尽力できる者がどれほどいるでしょうか。自分だけならよいでしょう、子どもはじめ家族や親しい者達にも迫害が及ぶ事は火を見るよりも明らか。権力の暴走を前にして、ただ見ないふりをしてやり過ごすしかない…それは歴史が幾度も繰り返してきた事です。第二次世界大戦の日本でもそうでありましたし、現代日本でもそうです。私どもはなんと惨めな者でしょうか。現代に生きる私どももまた、クリスマス物語が語る、「人間の闇」を他人ごとにはできないのです。

3 キリスト・イエス

ですが、そんな惨めな私どもの為に、神の御子イエス・キリストは、人となってくださいました。聖書のヨハネの手紙Ⅰという書物にはこういうくだりがあります。

「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」(ヨハネ手紙Ⅰ 4:9～10)。

私どもの深い深い罪を償う為に父なる神は、ご自身と一心同体の神の御子を完全なる人間として私どもと全く同じ人間として、この世に送りました。もし、御子が完全な人間としてお生まれでないのであれば、私どもの身代わりとはなれないのです。ですから、全く我々と同じ人間、肉の身体をとってこの地上に宿られました。高い高いお方が低く低くなられたのです。最も豊かな方、宇宙の富をもっておられるお方が貧しく乏しくなられました。永遠のお方が時の中へと入ってきてくださった。全宇宙を造り出すエネルギーよりもまだ大きなエネルギーをお持ちの方、強い強いお方が、最も力弱い赤ん坊となってくださいました。父なる神は、そして御子キリストは、自らを守ることさえしないのです。私どもを罪の闇の中から救い出し、神の子とするためであります。

ある方は、クリスマスの聖書の言葉『いと高き所には、栄光、神にありますように』について、このように取り次いでいます。「最初のクリスマスの夜、天の大軍が賛美した神の栄光とはどういう栄光でしょうか。己を投げ捨てて低く下っ

て、天には残っていない神の栄光です。投げ捨てられた栄光、千々に破れ果てた栄光、傷つけられ、破れはて、泥にまみれた栄光です。クリスマスにおける『神の栄光』とは、それ以外のものではない。」と。

4 愛は変わること

先週も少し触れましたが、このような父なる神、子なる神の愛の出来事としてクリスマスに想いを馳せる時、「愛は変わることなのだ」と思います。愛は、自分の居心地のよい場所にふんぞり返っていない、相手の為に自分自身を変える事も厭わない。木っ端みじんにその栄光が飛び散っても惜しくもない…神の愛は、変わる事を恐れず、強く、激しく、私ども人間へとまっすぐに向かってきています。クリスマスの光—御子イエス・キリストです。

一方、愛を知らない者は、自分の領域から決して出ようとはしません。自分から変わろうとはしないのです。そして、相手を、周りを、自分の思うように変えようとさえします。ヘロデ大王がそうでした。エルサレムの住民もまた同じでした。

ですが、クリスマスの出来事を通じて神の愛を知った人は、どんどん変わっていきます。洗礼者ヨハネの両親であるザカリア、エリサベト、イエス様の母となるマリア、父となるヨセフ、最初に天使から救い主誕生のお告げを受けた羊飼達、東方の三博士達。彼らは自分たちの領域からイエス様のもとへと来て、どんどん変えられていくのです。

5 最初に変えられた人—マリア

さて、イエス様がお生まれになる九カ月前に時間を戻してみましょう。マリアは山道を急いでいました。「その頃、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った」。「山里」と聞くと、美しいのんびりした景色を思い描きがちです。しかし、原語は「山地」「山々」です。いつまでも続く、ごつごつした岩肌の多い山地、そこを大急ぎで、衣が裾にまといつくのを気にしながら、一人速足で南をさしていく若い村娘、それがマリアです。マリアはガリラヤ地方のナザレ村から、エルサレム近郊の親戚のエリサベトの家まで急いでいます。直線距離で110キロ以上あります。山あり谷あり、登ったり下りたり、曲がりくねった道。我々がバスを全速力で飛ばしても、四時間以上はかかるそうです。おそらくマリアは一週間はかかったでしょう。しかも彼女は、普通の身体ではありません。身ごもったばかり、妊娠初期、流産の可能性が高い時期です。

現代の一人旅とは、全く事情が違います。旅の途中、追いはぎ強盗や野獣に襲われる事もしばしばでした。若い女性がひとりで旅をするなど考えられないことでありました。どうして、マリアはそのような無謀な事をしたのでしょうか？

6 愛か？不安か？

私は以前、その理由は、「マリアは不安であったからだ」と考えていました。マリアは年若い娘であり、突然天使がやってきて受胎を告知していった、一端は受け入れたものの、身体にも受胎の兆候は現れる、この先自分はどうか？心細くて不安で仕方なかった。こんな時に最も頼りになるのは同性の先輩である母親です。ですが、その母親が天使の受胎告知を信じてくれるとは到底思えない。婚約者ヨセフと一緒に暮らす前に関係を持って律法を犯したと疑われるだろう。彼女は「天使が教えてくれたエリサベト叔母さんに会って、自分の身に起こっている事は神の出来事だという確信を得たい、この不安を分かち合えるエリザベトに会いたい。」マリアは不安な思いで山道を急いでいたのだろう…と考えていたのです。

しかし、ある説教者がクリスマスの説教の中で、「マリアはエリサベトの愛ゆえに、山道を危険も顧みずに急いで旅していた」と取り次ぎました。「エリサベトは身ごもり、五カ月の間引きこもっていた」とあります、エリサベトは高齢出産の初産。危険な出産を控え、引きこもって大事をとっているエリサベトをマリアは放っておけなかったのだろう。長い間、「うまずめ」とさげすまれて来たエリサベトおばさんが妊娠したと聞き、矢も楯もたまらなかった。マリアもまた、自分の領域で落ち着き払う事なく、自分を守ることせず、愛ゆえに大胆に行動した…というのです。

果たして、マリアは、不安に矢も楯もたまらずエリサベトの所に駆け付けたのか、それとも、愛の故に確信をもってエリサベトの所へと急いだのか？いったいどちらなのでしょう？

7 神の愛に圧倒される

聖書を読み直したいと思います。マリアがエリサベトのもとに駆けつける少し前、先ほどお読みしたルカによる福音書1:26～38、有名な受胎告知の場面にさかのぼります。ここでマリアは天使ガブリエルに挨拶を受けて不安に慄きます。そして「あなたは神からの恵みにより身ごもって男の子を産む」と告げられても、疑いと不安を消す事はできません。

しかし、35節「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。36 あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。37 神にできないことは何一つない。」という天使ガブリエルの言葉を聞いて、マリアは大きく変えられます。

この時、マリアの心に、父なる神の私ども人間に対する深い愛が、ものすごい勢いで流れ込んだきたのではないかと想像します。全宇宙を造られたお方

の御子が、自分の胎内に全く人間と同じように宿るまでに変わってくださる、父なる神と御子の激しいまでの、切ないまでの愛、途方もない愛に、全く自分を守ろうとしない愛に圧倒され、不安や疑いが押し流されたのでしょうか。彼女は神により、全く新しく変えられたのです。

8 へりくだり

そしてマリアは父なる神の愛に答えます。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように。」この言葉がマリアがどう変えられたかを表しています。この言葉は全てで、決定的でありました。だからこそ、天使ガブリエルは自分の任務が全うされた事を確信し、マリアのもとを離れることができたのです。このように神の愛は、私ども人間を変えます。どのように変えるのか？私どもを謙る者へと変えるのであります。それは溢れるほどに、神からの恵みを受けるためであります。

私どもには、皆、それぞれに異なる存在ですが、父なる神がご覧になれば、完璧な人など一人もいません。多かれ少なかれ、欠けがあり、凹みがあります。破れがあるのです。神がお造りになった命をいつもいつも喜べるわけではない。つらいことが続けば不安となる、幸運が続けば続いてで傲慢になる。そして不安になれば自分の命が喜ばず、傲慢になれば他者の命を軽んずる。そのような傾向のある私どもです。そんな一人一人が造り出す社会は、強い者が弱い者を支配する弱肉強食の社会です。その社会の中で、わたしどもは更に傷つき、傷つけ、自分や周りの人の欠けや破れや穴を大きくしている。

ですが、ですが、この欠けや破れのあることを自覚し、悲しくやるせない想いで父なる神の御前に出る時、私どもは、そのような私どもの為に、神はその栄光を木っ端微塵にしてくださり、人間となってくださったことに気づかされるのです。降り注ぐ雨のように、私どもの欠けや破れに向かって神の愛が降り注いでいると。そして、私ども一人一人のくぼみが、欠けが、破れが満たされ、どのような状況であろうとも、神を喜び、自分と他者の命を喜ぶ存在とされます。そして、その時、私どもは、聖なる者、神を愛し、自分を愛し、人を愛する者へと変えられるのだと思います。

神のみ前でも、自分には何の破れも欠けもない…と反り返っていたら、注がれる神の恵みは入ってきません。神の御前に、自分の欠けや凹み、弱さや乏しさを差し出して、そこに愛を注いでいただいて初めて、私どもは変えられるのです。聖なる卑賤な者へと変えられるのです。

9 愛に急ぐマリア

マリアもまたそうでありました。自分の不安や疑いを正直に申し述べた時、

それらを圧倒する神の愛を知ったのです。そして御前に遡り、豊かに神の恵みを受けました。ですから…マリアはエリサベトのもとへと急いだのは、不安故ではない、愛の故だった…と私は読み方を変えられました。不安や疑いで心が曇っているのであれば、オオカミや強盗に襲われるかもしれない旅路を一人で急ぐような力は湧いてこなかったでしょう。必ず神がお守りくださるとの確信が与えられているからこそ、危険な旅路をマリアはわき目もふらずに急ぐことができたのです。

しかし、なんという女性でしょうか。マリアの選んだ道は、通常私どもが考える方向とは正反対です。婚約者以外、それも神のもとから来る救い主を胎に宿すことを御前に遡って受け入れるだけでもすごいのに、妊娠初期に非常に危険な旅をしてエリサベトのもとへ駆けつけるなんて。マリアはひるまないのです。これは人間の仕業とは思えません。このマリアの様子は、彼女を通じて、神ご自身が、私ども人間の救いにその存在を賭け、急いでくださっている真剣さをあらわしているようです。マリアは愛ゆえに急いでいます。不安で弱い若い女性が大胆に愛に急ぐ者へと変えられました。

10 確信

私ども、人間の愛は、時に不適切な行いを招きます。不安に駆り立てられる愛となります。不安だから相手を自分の思うように支配したい、相手をあるがままには受け入れられない私どもの姿がそこにあります。しかし、神の愛は違います。相手をあるがままに受け入れ、その命を確信をもって喜ぶ愛なのです。

11 聖なる卑賤に生きる

私どもは自分達の欠けを凹みを破れを悲しみます。人の罪でがんじがらめにされたこの社会を悲しみます。我々だけでは、どうする事も出来ないからです。我々は途方にくれます。どうしてよいか分からない。人の憎しみに傷つく自分であるにも拘わらず、人を憎んでしまう自分がいます。傲慢と不安から抜け出せない事もあります。人生の試練が襲いかかるからです。病気、経済的な行き詰まり、家族の問題、不条理と思える事が多々起こり、私たちを神から引き離そうとします。愛に生きることなど、とても現実的とは思えない…私どもは困難の前に立ちすくんでしまします。南青山の児童相談所施設に反対する人々もそうなのです。

しかし、だからこそ、わたしどもは喜ぶことができるのです。神の御子が私どもに与えられたクリスマスの出来事を。最も大切なものを惜しまず私どもに与えて下さった父なる神は、愛に生きる事ができないわたしどもを変えてくださらない筈はありません。わたしどもが問題に行き当たって途方にくれる時、欠け

のあるまま、凹みのあるまま、破れのあるに、神の御前に出て、謙り、祈り求めたとき、我々の凹み、破れに神の恵みが注がれます。そうして私どもは、聖なる罪人として、愛に生きる者とされ、具体的な取るべき行動を教えてください。そうして初めて、私どもは「今だけ、金だけ、自分だけ」なる生き方から脱却でき、他者と関わり、他者を愛する者となれるのだと聖書は語っています。

それは、山里を急ぐことになるとはマリア自身も考えつかなかったように、私どもが考えつかないような想いもかけない道であるでしょう。私たちには常に神の道は新しい姿で立ち現れてきます。しかし、神は共にいてくださいます。マリアのように恐れをすて確信をもって、その道を急ぎたいと思います。そして、マリアと共に、エリザベトと共に声高く「神を崇めよ」と歌い、クリスマスを迎えたいと願います。

クリスマス、おめでとうございます。